



# 大建築の聖地

2012.07 / Vol.1





# 第1回 大建築の聖地

島根県庁周辺は「大建築の聖地」です。

……と、いきなり言われても何のことだか分かりませんよね。

そもそも「大建築」という言葉からして耳にされたことがないと思います。

「県庁周辺にそんな巨大な建物は無いのでは？」と思われるかも知れませんが、「大建築」とは単なる“巨大な建物”のことではありません。「大建築」とは、ある特定の時期に建設された、特徴的なデザイン傾向を持つ建物の総称なのです。

では一体、「大建築」とはどんなものなのでしょう？

また、なぜ県庁周辺が「聖地」と呼ばれているのでしょうか？

## 「大建築」とは？

今から十数年前、インターネット上にその名も「大建築」というサイトが登場しました。（※1）

このサイトでは、全国各地の「大建築」と呼ばれる建物がミシュランガイドのような☆印評価と愛情あふれる解説付きで紹介され、建築関係者を中心に大きな話題となりました。

では、「大建築」とはどんなものか？ 厳密な定義ではありませんが、主な特徴を挙げてみましょう。



「大建築」の超名作  
（菊竹清訓「旧都城市民会館」昭和34年竣工）★

- ① 高度経済成長期（1950年代後半～70年代前半）に建設
- ② “日本の伝統”や“先端科学技術”をイメージしたデザイン
- ③ 打ち放しコンクリート仕上げの多用
- ④ 柱・梁などの構造体を（やや大袈裟なほど）強調

※1 「大建築」  
(<http://www.yamaoka-ao.com/daikenchiku.html>)  
サイト作者で「大建築」の名づけ親でもある山岡哲哉さんは、神戸を拠点に活動する若手建築家です。山岡さんは世界的建築家・菊竹清訓氏の事務所の出身で、島根県立美術館の設計・監理も担当された島根県に所縁の深い方です。



敗戦からの奇跡的な復興を遂げた高度経済成長期の日本の建築家たちは、アメリカのアポロ11号月面着陸（1969年）に象徴される同時代の“先端科学技術”からデザインのインスピレーション（※2）を得ることもしばしばでしたが、一方で西洋文化のモノマネではない（かといって「四角いビルに瓦屋根を載せただけ」の安易な和風建築でもない）、近代日本にふさわしい建築を生み出さなければならないと考えていました。

彼らの多くが着目したのは、日本の伝統的な木造建築に見られる飾り気の無い白木の“素材美”や、木組みの“構造美”でした。これを「鉄とコンクリートの建築」で表現するにはどうすればよいか、試行錯誤の結果たどり着いたのが「コンクリート打ち放し仕上げ」や「柱や梁などの構造体を強調するデザイン」だったのです。

ただ、日本の伝統を重要視していたわりには「控えめで奥ゆかしいデザイン」よりも「大袈裟で派手なデザイン」が目立つのですが、これはもう、高度経済成長期の“勢い”という他ないでしょう。

むしろこのパワフルさこそが「大建築」と命名される由縁であり、「大建築」の最大の魅力なのだと思います。

なにはともあれ「百聞は一見に如かず」。ぜひ一度「大建築」のサイトをご覧ください。建築の専門家でない方にも分かりやすい、とても楽しいサイトです。

## 県庁周辺が“聖地”なワケ

島根県庁周辺には、「大建築」サイトで「（勝手に）国宝認定」された県庁舎や旧県立博物館（現第三分庁舎）を始め、優れた大建築がゴロゴロしており、「大建築の聖地」として大きくクローズアップされています。

「大建築の聖地」が生まれた背景には、昭和30年代～40年代にかけて田部長右衛門元知事の強力なリーダーシップの下で推進された「島根県庁周辺整備計画」の存在があります。

この都市計画的視点に立った長期的な施設整備計画は、当時としては極めて先進的なものでした。その評価は非常に高く、昭和45年には日本の建築界で最も権威のある建築学会賞を受賞しています。（※3）

また、主要な建築の設計には安田臣（県庁舎・県民会館）（※4）と菊竹清訓（県立博物館・図書館・武道館）（※5）が起用され、県庁周辺は大建築界（※6）のスターによる夢の競演の舞台となりました。



島根県庁舎（昭和34年竣工）★



旧 県立博物館（昭和33年竣工）★

近代のモダンデザインと松江城周辺の伝統的景観が美しく調和した「大建築の聖地」は、このようにして生まれたのです。

※2 島根県立武道館・空調吹出口（現存せず）★



※3 当時、都市計画による学会賞受賞は、新宿副都心や大阪駅周辺といった大都市の事例しかなく、島根県のような地方の小都市が受賞することは非常に画期的なことでした。

下の写真は家屋文鏡を模した建築学会賞の賞牌です。（管財課所蔵）



裏面



表面

※4 安田臣（1911-1977）島根県邑智郡出身。早稲田大学建築学科卒。建設省営繕局等を経て独立。代表作は「島根県庁舎」、「大分県庁舎」など。

※5 菊竹清訓（1928-2011）福岡県久留米市出身。早稲田大学建築学科卒。'60年に黒川紀章らと、人口増加や社会変化に合わせて生命体のように成長可能な建築・都市を目指す「メタポリズム（新陳代謝）グループ」を結成、世界的な注目を集めた。代表作は「スカイハウス（自邸）」、「出雲大社庁の舎」、「東光園」など。

※6 「そんな“界”は無い」とか言わないでください。

【写真提供】

山岡 哲哉氏（★印）

## 大建築の大改修を大応援します。

さて、申し遅れましたが、私たち「大建築 友の会」は、島根県総務部営繕課の職員を中心とする有志の会です。

新聞報道等でご存じのとおり、今年度から県庁周辺大建築の耐震補強工事が順次スタートしますが、「大建築 友の会」はその側面的支援を目的とする“非公式”のグループとして結成されました。本誌『大建築の聖地』の発行も支援活動の一環です。

県庁周辺の大建築は旧耐震基準に基づいて設計されたものであり、現行の耐震基準には適合していません。したがって、いつやって来るか分からない大地震に備え、早急に補強を行う必要があります。

私たち「友の会」のメンバーは、実際に県庁周辺大建築の耐震補強工事を担当していますが、必要な耐震性を確保すると同時に、近代建築史に名を残す美しい建築デザインを損なうことのないよう、できる限り配慮しながら業務に取り組んでいます。

今後、本誌では、県庁周辺大建築の建築デザインや歴史的価値について私たちが考えていることを綴っていきます。

県庁周辺の大建築の魅力や、それを守っていくための私たちの取り組みについて少しでもご理解をいただくことができれば、これほどうれしいことはありません。



◇ 次号から、島根県庁舎についてお話ししていきたいと思えます。